砂丘

砂砂砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
砂丘

【Ｎコード】
Ｎ４２１３Ｎ

【作者名】
砂砂砂

【あらすじ】
砂丘で人が二人音を上げて、砂が蹴り上げられて落ちていき流れる。月に音が昇り食べられ、人がそれを知らず星は知っている。星は見守っている。

月光が砂の一粒に染みこんでいる。
砂丘は青白く、夜を越えるために静まり返る。砂粒は穏やかだ。
溶けてしまいそうなほどに砂粒は、水の雫であるように容易に流れ、月光へ手を伸ばすことも無く。下へ下へ、下へ下へ、流れる砂の粒。
指を絡めながら砂を踏み、月光を浴びながら前へ進んでいく。人は、二人。
心地よく砂丘で鳴る、砂が踏まれる音。連なって夜空へと運ばれていく音を、月が拾っている。
音を月が拾っている。彼らの息遣いも、拾っている。
音を月が拾っている。音を月が拾っている。音が月に食べられている。
子供だった。一人はまだ幼く映る。もう一人は少しだけ大人だった。少しだけ大人。
手を結んでいた。手と手を繋いで夜をはぐれないように気をつけていた。彼と彼女は、砂丘を踏んでいて。音を鳴らしていた。月に拾わせて、音が食べられている。砂があって人があって音があって月があった。あるいは、月があって人があって砂があって音があって。砂丘で交流が静かに行われている安らぎの揺り篭が、どこまでも連なっていく。砂丘は青白く、どこまでも広がっている。
追跡されているわけではなかった。また、誰かを追いかけているわけでもなかった。
二人は夢を見ず、砂丘で眠りにも落ちず、追跡されてもおらず。
だけど走っている。砂が蹴り上げられて星空に飛んで、すぐに落ちてしまうけれど、彼らは足を止めたりしないで走り続けている。
夢を見ず、眠りに落ちず、足を止めず、手を繋ぎ。
星は音を拾わない。月に任せること。音は星に拾われている。人

は夢に落ちず、月へ手を出さず。
顔を上げない。だから星を知らない。二人はどこまでも砂を蹴り上げる。
…はぁ…は…はぁ…
二人は息を切らしていて熱もある。幼い子の方が熱があって、少し大人の子はその熱を案じている。夢を見ず、現実の中で、息と熱ばかりがあがる。青白い砂丘を駆け抜けているけれど、どこまでも連なっているのに。星は下を見ているから彼らを知っている。だけど二人は顔を上げないからそれを知らない。二人は知られていることを知らない。夢を見ず眠りに落ちず、走り続けた。
「みぃーつけた」
幼い子が叫んだ。息を切らしながら、嬉しそうに、流れ落ちる砂に向かって。
砂に塗れたその地に輝く丸い宝石は、青白い砂丘の中で情熱的に赤。赤の煌きが月に向かって吠えている。主張する、存在感、を、煌きで表現して、二人の、人が、救い上げて。
二人が手の平で、労わって、優しく包み込む。一つで寂しかったねと、掌で、暖めてあげて。
星たちは、知っている彼らと、知っている赤と。見守っていた彼らと赤が吠え上げている安らぎを見る。星が一つ流れて砂へと落ちる。連なって、青白い砂丘に、星が追いかけて、音を上げる。喜びを歓迎して、星たちが砂丘に鳴らし、音が月に昇り、昇り、昇り、食べられていく。
赤く、輝く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4213n/

砂丘

2010年10月8日23時45分発行